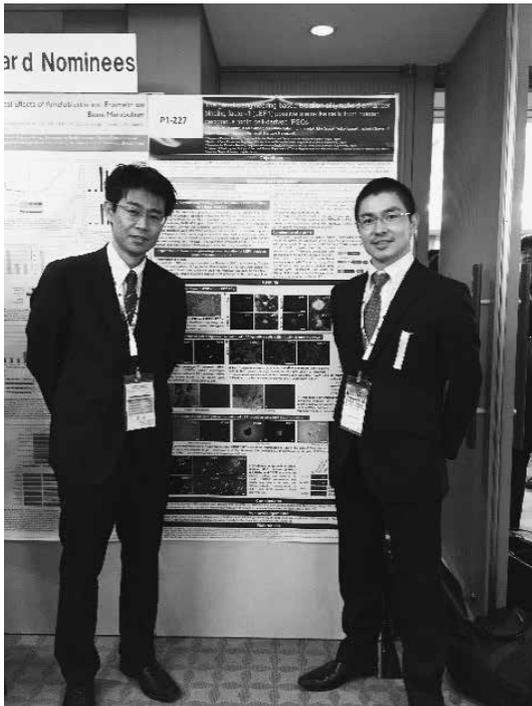


大学院に行こう

小児歯科学分野 村上 智 哉



2016年アジア小児歯科学会での学会発表

小児歯科学分野の村上智哉と申します。早いもので気づけば4年間の大学院生活が終わり、「大学院に行こう」の原稿依頼をいただきましたので、私の経験を交えながら大学院について述べさせていただきますと存じます。

私が新潟大学歯学部小児歯科学分野で大学院生活をはじめたきっかけは、ある「出会い」からでした。私の出身は福岡県であり、当初、歯学部を卒業した後は、地元で歯科医師として働こうと漠然と考えて研修医生活を送っておりました。もともと小児歯科に興味があり、鹿児島大学歯学部生の時には、小児歯科学分野で研究のお手伝いなどをさせていただきました。現新潟大学小児歯科学分野の准教授である齊藤先生にはその時に出会い、今でも日々お世話になっています。また、臨

床研修は小児歯科が学べる施設を選択し、その時期に現新潟大学小児歯科学分野教授の早崎先生に出会いました。このような流れの中で、さらに小児歯科について深く学びたいと思い大学院に進学することを決めました。

私が大学院に進学したとき、小児歯科学分野には社会人大学院生を含め4人が同時に進学しました。これはその年の全国の歯学部小児歯科の医局でもっとも人数が多かったようです。この同期4人がいたことは、私の4年間の大学院生活では、非常に重要であったと感じています。それぞれ違った研究テーマを持って研究を行っており、お互いの研究の進行状況や、悩みなどを研究の合間に話したりすることで解決策を見つけていくことができました。

さらに、他の大学院生との「出会い」もあります。学年を問わず、同じような研究をしている大学院生と研究会や学会でお会いする機会も多く、様々な意見交換ができるのも大学院の良いところだと思います。

大学院では、ある程度研究成果がまとまってくると学会発表を行うことが多いと思います。私の場合もそうであり、国際学会で発表をさせていただく機会もありました。そこでは、世界各国の研究者との「出会い」があります。自分と同じような研究を地球の裏側でも行っていることを知り、なんだか不思議な気持ちになったのを覚えています。

また、新潟大学歯学部では他の研究室との垣根が低く、私はいくつかの研究室に出入りさせていただきました。他の専門分野の先生方から、こころよく研究についてのアドバイスをいただきました。このように、大学院に行くと他分野の先生方

との「出会い」があり、研究を進める上でも重要であると感じました。

これまで、出会いのことばかり述べてきましたが、もちろん、大学院で一番大事なのは、自ら研究する姿勢だと思います。研究は大変な時もあるかと思いますが、世界で誰もやったことがないことを証明するという経験をするには、長い人生の中でかけがえのないことだと思いますし、チャレンジする精神が養われます。

大学院1年生のときは、研究のことはほとんど分からない状態でしたが、幸運にも大学院生の間

に小児歯科学会デンツプライ賞、新潟歯学会奨励賞などの賞をいただくことができました。これも多くの先生方や友人のお力添えがあったことだと感じています。また、大学院進学には家族の理解が必要であることも確かだと思います。大学院進学を後押ししてくれた両親には大変感謝しております。これから大学院進学を考えている方、大学院での出会いは、あなたの人生をさらに面白くしてくれるかもしれません。皆さん、大学院に行こう！！



大学院にいろいろ

摂食嚥下リハビリテーション学分野 酒井 翔 悟

「大学院」といえば、どのようなイメージをお持ちでしょうか。「研究をする」「研究者になるためのステップ」「博士号が取得できる」等、それぞれもたれているイメージは違うと思います。私がもっている「大学院」のイメージは、「自分の生き方の基盤をつくる過程」という言葉があてはまると考えています。

私は2011年3月に新潟大学歯学部歯学科を卒業し、新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科・摂食嚥下機能回復部での研修を修了した後、摂食嚥下リハビリテーション学の大学院に進学して、摂食嚥下リハビリテーション学分野での研究生生活を送ってきました。2016年3月に4年間の大学院生活を終え、現在は口腔リハビリテーション科医員として、外来や病棟で摂食嚥下障害の臨床に従事しています。大学院に進学した当初、研究をしたい、将来は研究者になりたい、といった意思はもっておらず、ただ単に、研修中に経験した摂食嚥下リハビリテーションという分野をもう少し勉強したい、という考えしかありませんでした。

進学してしばらくすると、研究テーマを与えられ、そのテーマから抽出された様々な課題を解決するために動物実験を行う研究生生活が始まりました。右も左もわからない私に対して、先生方は大変熱心に、時に厳しく時に優しく指導して下さいました。次第に実験に慣れ、研究のデータ採取やそのまとめの技術を身につけることが出来、多くの学会発表を経験し、アメリカや東南アジアなど海外にも度々渡航する機会を頂きました。他大学の先生方と知り合いになったことも大学院に進学してよかったと思えることの1つです。学部学生の時のように与えられる授業を受け、実習をこなすのではなく、自ら考え勉強する習慣を身につけることが出来、とても充実した日々を送ることが

出来ました。

大学院生活を振り返ってみると、決して楽しいことばかりではありませんでした。日々の研究・臨床に加え、教育や研究に関する行事の補助、学会発表や論文作成の準備等に追わ



れ、時に逃げ出したくなる時もありました。しかし今となってはそのような様々なことに携わり、多くの貴重な経験が出来たことは、自分の人生にとってかけがえの無い財産になったと思っています。もし時間が戻ってもう一度人生をやり直すとしても、私は迷うことなく大学院進学を選びます。大学院での生活で得られた経験や知識はこれからの人生で必ず活用できる、自分の生き方の基盤になったと確信しています。

学位授与式で「大学院卒業は終わりではなく、これからの研究生生活の始まりである」というお言葉を学部長の前田先生から頂きました。その言葉を胸に、大学院生活で培った経験を生かし、今後も邁進していく所存です。

大学院進学は決してハードルの低いものではありませんが、もし少しでも進学したい希望を持たれている方がいらっしゃいましたら、私は胸を張って進学をお勧めします。他では決して得られない「生き方の基盤をつくる過程」を経験できるからです。

最後に、研究・臨床の両面でこれまで支えてくださいました、井上誠先生、辻村恭憲先生をはじめとした摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方に深く感謝申し上げます。

大学院に行こう

歯科矯正学分野 医員 大 倉 麻里子

歯学部卒業6年目の大倉麻里子です。歯科矯正学分野に所属しており、今年3月に大学院を卒業しました。「大学院に行こう」というテーマをいただきましたので、大学院へ進学した理由や大学院生活についてご紹介したいと思います。就職しようか、大学院へ進学しようか、進学するならばどの科にしようか迷っている学生・研修医の皆さんの参考になれば幸いです。

私は学生の頃から漠然とではありましたが矯正治療に興味がありました。ただ大学院については、歯学部卒業後、研修が終わってさらに4年間という期間を考えると躊躇する気持ちもありました。そこで、まずは半年間矯正のことを勉強してみようと思い、当院の歯科医師臨床研修プログラムBを選択し、研修医の半年間は矯正科でお世話になりました。しかし研修を通して、半年間だけでは矯正治療のことはわからないということを感じました。もちろん診断のための分析方法や基本的な治療の流れなどたくさんを学ばせていただきましたが、数年の期間を要する矯正治療を半年間見学しただけでは、矯正科の先生の会話にもついて行けず、理解するのが非常に難しく悔しい思いをしました。この時に「矯正治療についてもっと学びたい」という気持ちが強くなり、そのためには専門機関でしっかりとした教育を受け、自分も矯正治療を専門に行っていきたいと思ったのが、大学院進学を選んだ理由です。

歯科矯正学分野では、大学院生1人につき指導医がつき、セファロ分析や治療方針の作成、ワイヤーベンディング等の臨床テクニックまで、矯正治療に必要な基礎的な知識と実技指導をしていただきます。また、配当されたすべての患者さんについて指導医とともに治療方針を立て、毎週木曜日に行われる症例検討会に提出し、齋藤功教授を含めた医局員全員によるディスカッションを行う

ことで、患者さんにとって最良の治療方針を決定し、診療に向かうこととなります。さらにそれだけでなく、治療開始後は10か月ごとの口腔内写真チェックがあり、良かった点や改善点、今後の方針など指導していただきます。実際の私の大学院生活は、指導医の先生の診療見学、自分の患者さんの診療、診療が終わった後は技工室で予測模型や治療に使用する技工物の作製を行い、症例検討会や治療経過チェックの準備をする毎日の繰り返しでした。検討会では先生方も本気で意見してくださいますので、どの症例についても何時間もかけて考察し、毎回ものすごく緊張しながらプレゼンしたのを覚えています。毎晩帰りが遅くて肌がぼろぼろになりました。しかし大学という専門の機関でしっかりと全症例を指導していただく喜びは非常に大きく、またその治療方針にむかって試行錯誤しながら治療を進めていく日々は、とても充実していました。

大学院生活でもう1つの大切な仕事は研究です。私は「矯正的歯の移動と歯髄反応」をテーマにした基礎研究をしています。歯科矯正学分野の先生だけでなく、う蝕学分野の先生や硬組織形態



歯科矯正学分野の同期と（筆者は中央）

学分野の先生など、他分野のたくさんの先生に指導していただきました。このように基礎・臨床問わず様々な分野の先生の意見を聞きながら研究ができるのは、大学院生の魅力の1つだと思います。また、日頃臨床で疑問に思ったことを基礎研究に反映させて解析を行うことは、臨床講座ならでもであり、大学に残らなければ経験できないことだと思います。厳しい指導の下で実験し、実験データに一喜一憂しながら少しずつ解析を進めていく過程は決して楽なものではありませんでしたが、たくさんの先生方のご支援をいただき、無事

博士号を取得することができました。

大学院の利点は専門性の高い分野の臨床技術を磨くことができることと、自分が興味を持ったことについて研究ができることだと思います。もちろん授業料も期間もかかるので、良いことばかりではありませんが、自分のやりたいことや人生設計に、大学院の利点が一致するのであれば、大学院での4年間は必ず有意義な期間になると思います。学生・研修医の皆さんの悔いが残らない歯科医師人生を、心より応援しています。

